

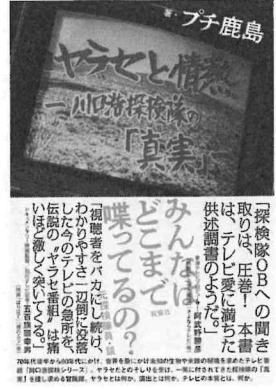
メディアを志す人のために 50人が 薦める50冊 (下)

弊誌『放送レポート』は、1972年の創刊から五〇周年を迎えました。これも支えていただいた皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。これを記念して、各界の方々に、メディアで働く人のため、またメディアで働くことを志す人のため、そして日常的にメディアを利用する人のために、推薦したい書籍一冊を挙げていただきました。二回に分けて掲載します。
(編集部)

阿武野勝彦
東海テレビ放送・ゼネラルプロデューサー

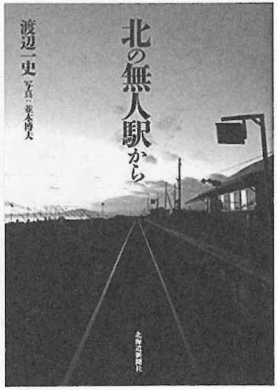
『ヤラセと情熱―川口浩探検隊の「真実」―』
プチ鹿島著

現在進行形のテレビの低迷と、蔓延しているテレビマンの窮屈病を「温故知新」。川口浩探検隊の裏舞台を、その関係者に丹念に取材している。読み進めていくと、まるで供述調書のように思えるのだが、そこには取材対象とテレビへの深い理解と愛情があることがわかる。特に、私の『さよならテレビ』ドキュメンタリーを撮るといふこと〜(平凡社新書)と合わせて読むことをお勧めする。温故知新と我田引水…。



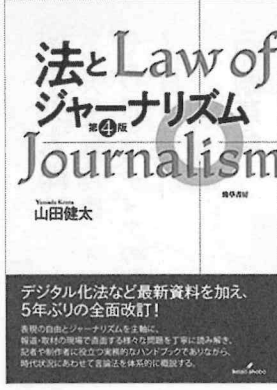
木田修作
テレビユー福島・記者
『北の無人駅から』
渡辺一史著

人の数だけ歴史があり、土地には必ず魅力があり、それぞれ何かを背負っている。そんな普遍的なことが、長い時間をかけた丹念な取材で編まれた、地層のような本だ。北海道の無人駅を起点に、環境や農業などの社会的な課題を温かな眼差しで見つめたルポルタージュで、読後はいつもの街が違って見えたような気がした。東京で記者をしていた頃、夜回り前に池袋のジュンク堂で出会って以来、よりどころにしている一冊である。



笹田佳宏
日本大学法学部新聞学教授
『法とジャーナリズム第4版』
山田健太著

ジャーナリズム活動に関わる法を網羅している一冊。大学の教科書としても活用できるが、筆者は「序にかえて」で本書の第一の特徴を「単なる法律解釈や判例紹介にとどまらず、現場でその法律がどのように運用されているか、課題があるかに触れている点である」としている。報道・取材の現場で日々、直面する課題を表現の自由の観点から捉え直すことができる内容となっている。姉妹書の『ジャーナリズムの倫理』も合わせてお薦めしたい。



島洋子
琉球新報取締役編集局長
『オキナワの少年』
東峰夫著

本企画としては毛色の違う本を紹介する。米統治下にあった沖縄・コザ市で米兵相手の売春宿で生計を立てる少年つねよし一家の、逞しくも哀愁漂う生活を描写する。何より驚いたのは沖縄言葉を大胆に使い小説として成り立っていること。いわゆる「標準語」の本しか読んだことのない中学生にとって自由で生々しい表現は衝撃だった。表現の自在さにも惹かれる。戦後沖縄の過酷な歴史を庶民の視点から知ることができ



鈴木秀美
慶應義塾大学メディア・コミュニケーションシオン研究所教授、大阪大学名誉教授
『密約―外務省機密漏洩事件―』
澤地久枝著

私は授業で沖縄密約事件を取り上げるとき、記者が取材の手段として情報源の女性を利用したとの最高裁の事実認定を鵜呑みにしないよう注意し、まったく違った見方をしている本書に必ず言及してきた。この裁判では、政府が国民を騙したという事件の本質が、いわゆる下半身問題に見事にすりかえられた。2006年の本書「あとがき」にある通り、それを許した当時の主権者の責任は、現在の私たちに示唆と教訓を残しているはずである。

